平成 30 年 8 月 20 日

博士論文審査結果報告書

報告番号

学籍番号　1529022013

氏　　名　遠田　大輔

論文審査員

主　査　（教授）　城戸　照彦　印

副　査　（教授）　須釜　淳子　印

副　査　（教授）　塚崎　恵子　印

論文題名　Predictors of potentially harmful behaviour by family caregivers towards patients treated for behavioural and psychological symptoms of dementia in Japan

論文審査結果

【論文内容の要旨】

家族にとって認知症患者の介護は負担が大きく、Potentially harmful behaviour (PHB)をとる危険性が考えられる。本研究は Behavioural and psychological symptoms of dementia (BPSD)を伴う患者の主たる家族介護者の PHB の実態を明らかにし、予測因子を分析するとともに BPSD との関連性を明らかにした。BPSD の治療のため A 精神科病院高齢者外来を初診した患者と介護者 147 組を対象に、診療録からの情報収集と介護者に自記式質問紙調査を行った。介護者の PHB は、The modified Conflict Tactics Scale (m-CTS)の 10 項目のうち 2 点(ときにある)以上が 1 項目以上あった場合に PHB 有りと判断した。介護者の介護負担感(J-ZBI_8)と精神的健康度 (SF-8 MCS)、患者の日常生活動作(N-ADL)と認知症状(MMSE)と BPSD(NPI)等を調べた。有効回答を得た 133 組を分析した。PHB 有りと判断された介護者は 65 人(48.9%)だった。PHB のうち「叫んだり怒鳴ったりした」有りが 52 人(39.1%)と最も多かった。PHB 有無の群間で比較した結果、有り群は、息子が多く、義娘が少なかった。また、J-ZBI_8 が高く、SF-8 MCS が低く、N-ADL と MMSE が低かった。NPI 総点が高く、下位項目の興奮、無気力、易刺激性、異常行動、睡眠、食欲・食行動異常が高かった。さらに多重ロジスティック回帰解析を行った結果、義娘、J-ZBI_8、易刺激性、食欲・食行動異常が PHB の予測因子として抽出された。BPSD を伴う患者の介護家族には PHB のリスクが高いことが示唆され、患者の症状への治療的介入と、介護負担の軽減と患者への対応に関する情報提供が必要であると考える。

【審査結果の要旨】

本研究は、国内外で初めて BPSD を伴う認知症患者に対する介護者の PHB 発生に関与する BPSD の症状を明らかにした。本成果は PHB の危険が高い介護者を予測し、予防のための支援に有用である。公開審査では、母集団と対象者の選出方法、分析方法、成果の還元と今後の発展に関して質疑され、適切な応答がなされた。

以上、学位請求者は本論文の論文審査及び最終試験の状況に基づき、博士（保健学）の学位を授与するに値すると評価する。